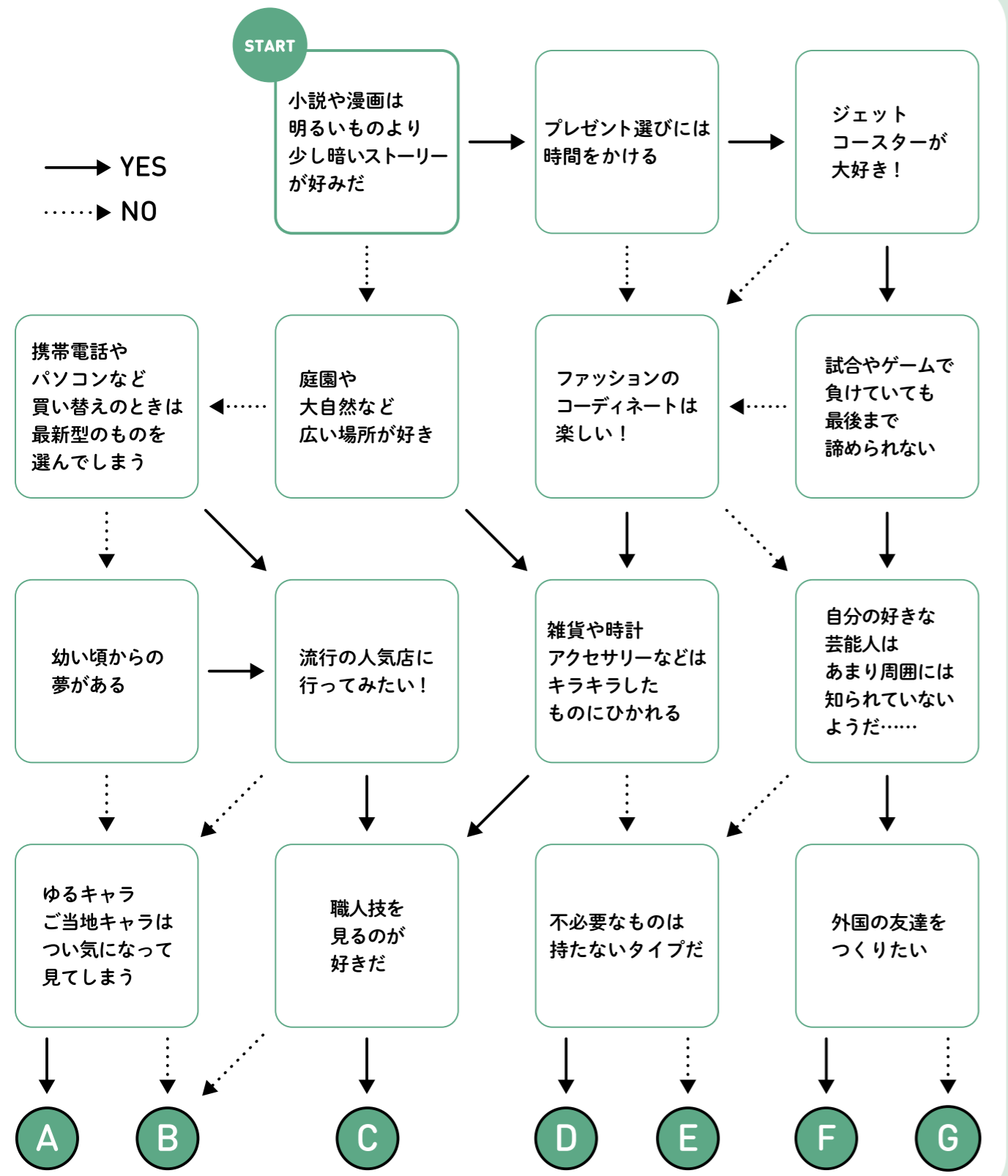


# 音楽診断

## 第8回 ベートーヴェンのおすすめ名曲編

『ヴァン』オリジナルでお届けする音楽診断企画の第8弾。今回は2020年のベートーヴェン生誕250周年を記念して、ベートーヴェンが書き上げた7つの名曲から、あなたにおすすめの作品をご紹介します。

監修・解説 = 西原 稔  
Text = Minoru Nishihara



あなたのタイプとおすすめは?

### A 『ヴァイオリンと管弦楽のためのロマンス第2番』へ長調 (作曲年: 1798年)

ヴァイオリンと管弦楽のための作品で、1798年に作曲されました。ヴァイオリン独奏で奏されるアダージョ・カンタービレの楽想はとても愛らしく美しい情緒に満ちています。作品は小ロンド形式で書かれ、間に2つの中間主題の部分を含みます。ヴァイオリンの奏する細やかなパッセージがとても魅力的です。『ロマンス第1番』と長調も美しい作品で知られています。



### B 『交響曲第7番』 (初演: 1813年/ウィーン)

この交響曲が初演された1813年はナポレオン戦争の最後の激戦のさなかでした。これが初演されたのは「ハーナウ戦役傷病兵のための救済資金調達慈善演奏会」でした。この初演は大成功で、とくに第2楽章のアレグレットは繰り返し演奏を求められるほどでした。この楽章は同じリズムを繰り返しながら、次第に楽器の数を増やし、壮大な音楽へと発展していきます。



### C 『ピアノ協奏曲第5番《皇帝》』 (初演: 1811年/ライプツィヒ、ゲヴァントハウス)

1811年に初演されたベートーヴェンの最後のピアノ協奏曲です。ピアノ独奏の雄大なカデンツァ(技巧的な独奏)で開始し、その後のロマン派のピアノ協奏曲に大きな影響を与えました。第1楽章は変ホ長調の輝かしい調で開始し、第2楽章はロ長調の沈んだ調が用いられているのも特色です。そして、第2楽章の最後の部分はそのまま連続して第3楽章に入ります。



### D 『ピアノ・ソナタ第23番《熱情》』 (作曲年: 1804年~1805年)

1805年、ベートーヴェンは寄贈を受けたフランスのエラール社の新型ピアノを用いて完成したのがこのソナタです。これまでのウィーンのピアノ(はね上げ式)とは異なる、現代のピアノと同じ突き上げ式の打弦装置のピアノで、高い音域が5度広くなっています。ベートーヴェンは第1楽章ではリピート記号を廃するなど、ソナタ形式の大きな革新を行いました。



### E 『交響曲第9番《合唱付き》』 (初演: 1824年/ウィーン、ケルトナートーア劇場)

1824年に初演されたベートーヴェンの最後の交響曲で、第4楽章は文豪シラーの詩に作曲した合唱になっています。合唱付きの交響曲の最初の作品で、第4楽章の最初の部分にそれまでの3つの楽章の主題が再登場します。人間はみな友人であると歌うこの作品は、ベートーヴェンの理想主義をよく表しています。作品は4人の独唱者、合唱、オーケストラで演奏されます。



### F 『弦楽四重奏曲《ラズモフスキー》』 (作曲年: 1806年)

ラズモフスキーはウィーン駐在のロシアの大使で、音楽愛好家でした。1806年に作曲され3曲からなっています。ベートーヴェンはそれぞれの作品にロシアの民謡を取り入れました。以前の初期の弦楽四重奏曲とは異なり、主題が入念に組み立てられ、素晴らしい傑作にまとめ上げられています。とくに第3番の第4楽章はとても壮大なフーガになっています。



### G 『ミサ・ソレムニス』 (初演: 1824年/サンクトペテルブルク)

ベートーヴェンの最大の支援者は皇帝の弟のルドルフ大公でした。大公が大司教に就任することを祝って作曲が開始されましたが、就任式に作曲が間に合いませんでした。とても規模の大きなミサ曲で、最後の「アニュス・デイ(神の子羊)」の「我らに平安を与えたまえ」の合唱は感動的です。『交響曲第9番』の初演時に、抜粋した形でウィーン初演が行われました。



西原 稔(音楽学者)  
山形県生まれ。東京藝術大学大学院博士課程満期修了。現在、桐朋学園大学音楽学部教授。18、19世紀を主対象に音楽社会史や音楽思想史を専攻。「音楽家の社会史」、「聖なるイメージの音楽」(以上、音楽之友社)、「ピアノの誕生」、「クラシック 名曲を生んだ恋物語」(以上、講談社)、「楽聖ベートーヴェンの誕生」(平凡社)などの著書のほかに、共著・共編で「ベートーヴェン事典」(東京書籍)、翻訳で「魔笛とウィーン」(平凡社)などがある。

※このほかの著書はp.35をご参照ください。